

久米島後期貝塚の立地状況

久手堅 稔

久米島は沖縄本島那覇市のほぼ西約100キロメートルに浮かぶ面積58平方キロの島である。周囲は珊瑚礁がよく発達していて特に島の東部と南部沖合はリーフが取り巻いていてその中にある礁湖（ラグーン）は、貝塚時代のいにしえから島の人々に豊かな幸を与え続けてきた。

久米島の地形を見ると島の北部を占める標高326メートルの頂上をもつ宇江城山系と南部には標高287メートルを頂上とするアーラ山系が鎮座していていずれも小河川が発達していて複雑な山ひだを形成している。こうした山岳地域も古代より食料を得るための場所であったと想定できる。

久米島において貝塚の立地状況を見た場合きわめて偏った分布を示している事に気がつく。島の西部には大原貝塚群に代表されるように多くの貝塚が分布しているが東部においては、謝名堂、真謝、泊、銭田貝塚等数カ所の貝塚が確認されているにすぎない。

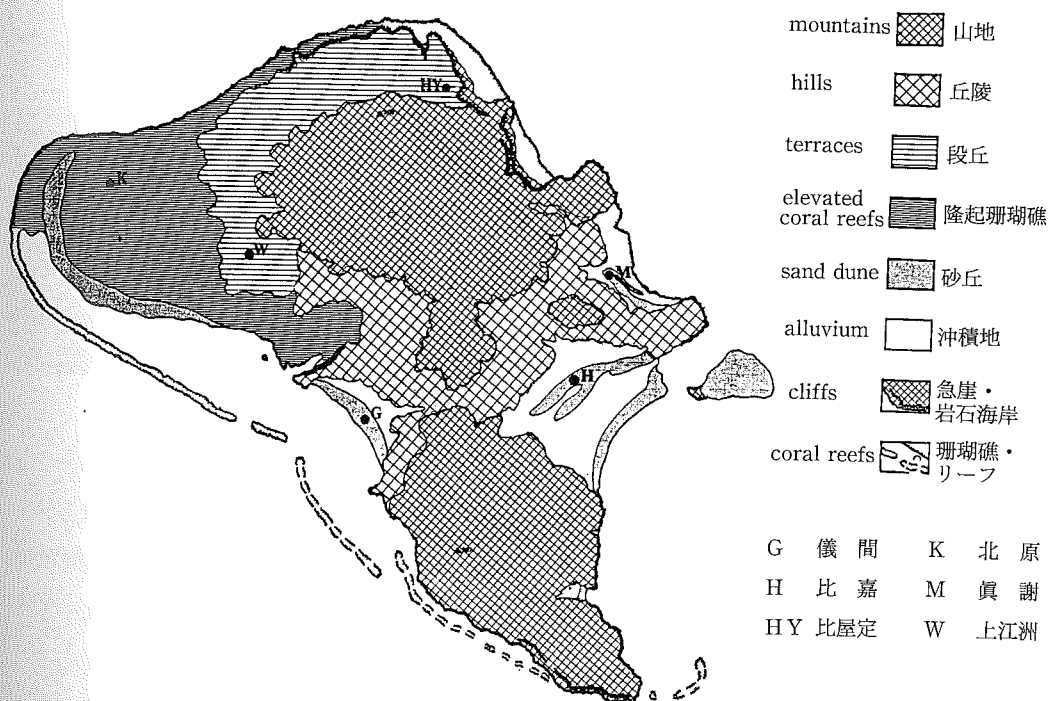


図1 久米島の地形図（法政大学『沖縄久米島』より）

久米島の貝塚分布表

久米島西部

阿里貝塚

仲泊貝塚

ウルル貝塚（3地点）

清水貝塚（2地点）

大原貝塚群（7地点）

大原第3貝塚

北原貝塚（3地点）

下地原貝塚

下地原遺跡

下地原洞窟遺跡

ヤージャー貝塚

ハンタバル遺跡

バケーマシ遺跡

ミッチン原遺物散布地

クイంగాグスク遺物散布地

長作原遺物散布地

久米島東部

銭田貝塚

謝名堂貝塚（2地点）

泊貝塚

真謝貝塚



発掘及び表面調査での時期的区分

前期相当時期

1. 大原貝塚(指定地区)、2. 長作原遺物散布地、3. 大原第3貝塚、4. ハンタバル遺跡、5. ウルル貝塚A地点、6. 阿里貝塚(客土による持ち込みなのか不明)、7. 北原第2貝塚(1993年度発掘により確認)、8. 謝名堂第2貝塚

中期相当時期

9. 下地原遺跡、10. ミッチン原遺物散布地、11. 大原第3貝塚、12. 大原貝塚(指定地区西接地、発掘により確認1980年沖縄県教育委員会『大原』)、13. 大田辻遺跡、14. クイంగాグスク遺物散布地

後期相当時期

15. 下地原貝塚、16. パケーマシ遺跡、17. ヤージャガマ遺跡B地点、18. 北原第1、20. 第2、21. 第3貝塚、22. 大原第2貝塚A地点、24. B地点（発掘により確認1992年具志川村教育委員会）、25. C地点、26. D地点、27. E地点、28. F地点、29. 大原東貝塚、30. 清水西貝塚、31. 清水貝塚（発掘により確認1989年具志川村教育委員会『清水貝塚』、32. 仲泊貝塚、33. ウルル貝塚B、34. C地点、35. 阿里貝塚（前期との複合の可能性あり）、40. アーラ遺物散布地

網掛けは島の東部に位置する遺跡

以上40地点から貝塚時代の遺物が採集される。

ところで久米島の現地図を眺めてみると遺跡の分布のあり方にきわめて特徴が現れている。島の東部は希薄な分布状況を呈しているが西部においてはきわめて高密度に分布する。このことは当時の久米島においてどのような事例にちなむのか考察を行う。



久米島では後期貝塚はほとんど砂丘地に立地しているが、その中で立地条件として特殊と思われる貝塚は下地原貝塚がマーヅにあり、北原第3貝塚は隆起珊瑚礁の礁原に僅かに吹きたまった砂地にある。仲泊貝塚（比較的広大な貝塚）は砂嘴の上にあったと想定され砂州で区切られた入り江を挟んでウルル貝塚や清水貝塚があるがいずれも貝

塚後期の貝塚であるが、ただ同時期にこの3貝塚が立地していたのか不確定である。東部の謝名堂貝塚は仲泊貝塚を中心とする貝塚の立地状況と下記の条件が類似する。

まず、砂地上にあること、傍らに小河川が流れていること、背後地がなだらかな丘陵地になっていること、前面にイノー（礁湖）が広がっていること等である。

このような条件を有するところが貝塚後期においては好まれた場所であったと推定できる。ところで島の東部においてはこの条件を満たす地形がきわめて少ない。現在の地形をみると遺跡があっても良さそうな箇所がある。たとえば、嘉手苅、儀間集落のある砂地地

帯島尻集落、トクジム旧集落跡、伝アール集落跡、東・西オー島などである。

現在の嘉手苺と儀間集落は貝塚時代から以降にできたのであり、新しい集落が砂嘴上に形成されたものであろう。現在の祭祀形態からすると嘉手苺や儀間集落の草分けは2から3の血族集団が山手の方から随時移住してきてできたものであった。おそらくそれ以前はまだ陸地化が進んでいなかったのかも知れない。現に近世になっても集落の背後地は湿地帯であったのだがそれを干拓する事により新田を開き陸地化していったと推定できる。したがって嘉手苺、儀間集落ののる砂嘴は貝塚時代よりは新しすぎると推定できる。

トクジムや島尻集落の砂丘地も嘉手苺、儀間集落の当時の状況を考えた場合似たような状況にあったのではなかろうか。また、東・西オー島は用水に難点があったのではなかろうかと推定できる。その中では伝アール集落跡は立地条件としては前者に比較して最も恵まれた条件を備えていて表面調査でも土器の小破片が僅かに採集できる。しかし小破片すぎるため時期については不明である。また近年に2度ほど台風の高潮のため砂丘地が冠水してしまう状況であった。

このように久米島の貝塚後期の立地状況を見た場合砂丘地では現在での海拔5 m以上にあるのが普通である。こうして貝塚のみを追いかけた場合、前述したように砂地、前面に礁湖をもち、用水が近くで得られる、背後地がなだらかな地形であるという事が必要条件であるといえる。ところが久米島においては



貝塚と住居跡との関連がとらえられているのは1971年に発掘された北原第1貝塚のみである。図2と図3でもわかるとおり仲泊貝塚や謝名堂貝塚を中心にした地域では当時の地形から推定した場合水際に立地することになる。自然災害とくに台風時による高潮等を考慮した場合は住居は貝塚域から離れたところに立地すべきではないのか。あるいは銭田貝塚や北原第3貝塚は海拔5 m以下に立地していて(両貝塚ともくびれ平底が主に採取される)特に北原第3貝塚は少々台風の高潮でたびたび冠水する場所である。このような場所に立地する貝塚区域と住居区域との関連性などどう考えればよいか今後の課題となろう。

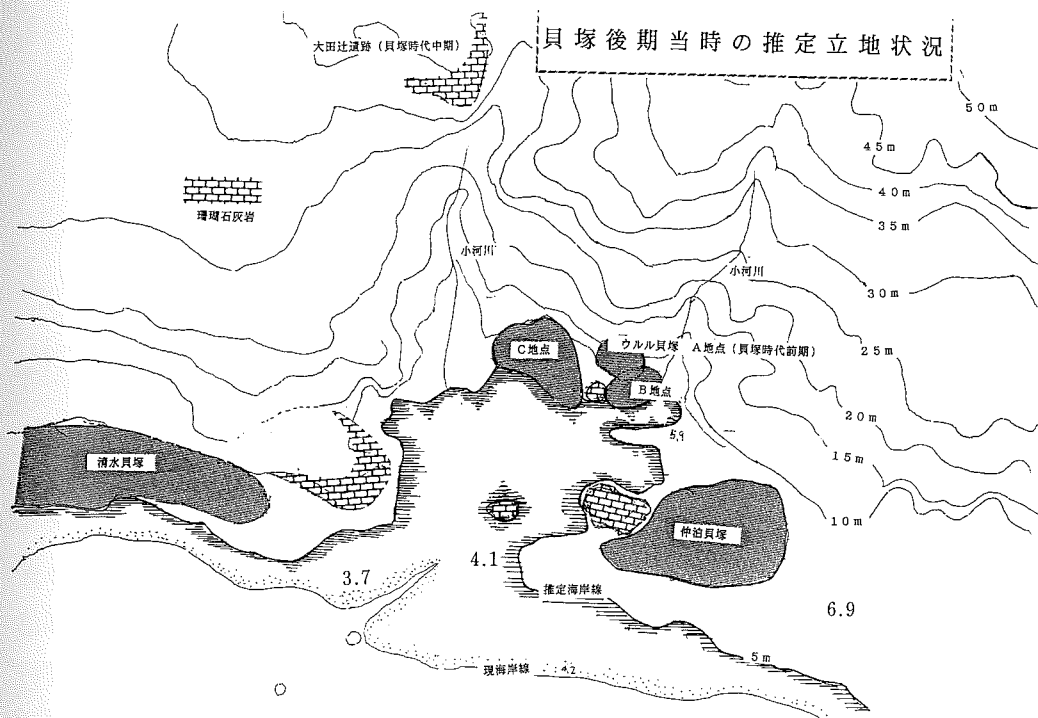


図2 貝塚後期の推定海岸線 (仲泊貝塚付近)

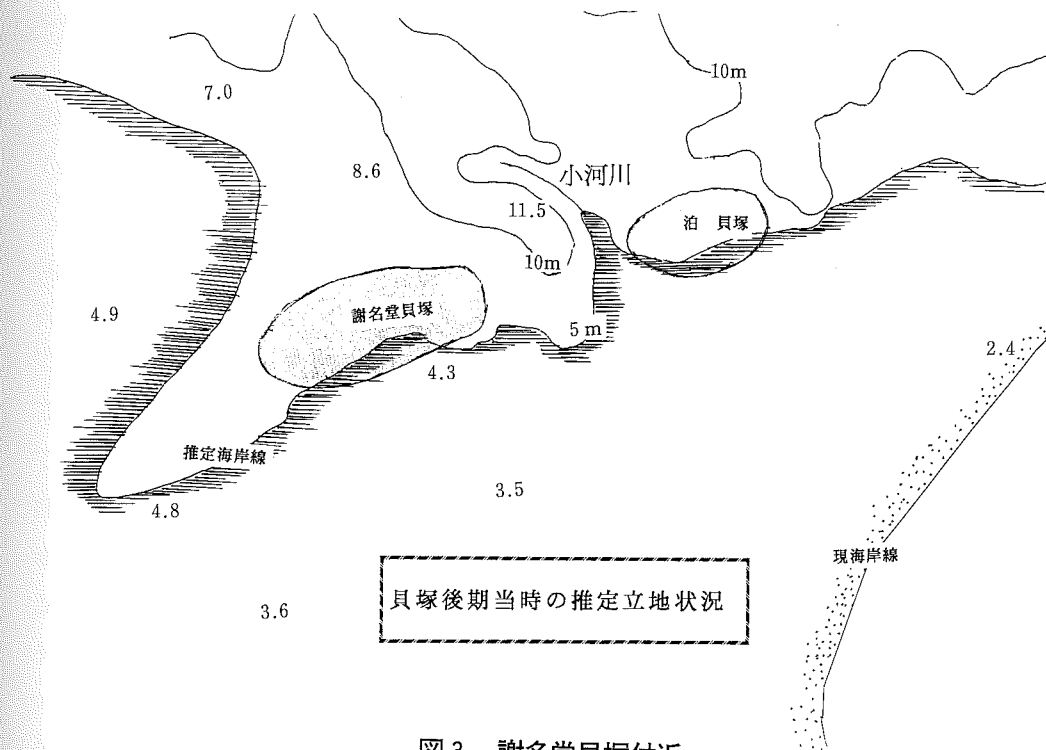


図3 謝名堂貝塚付近



図4

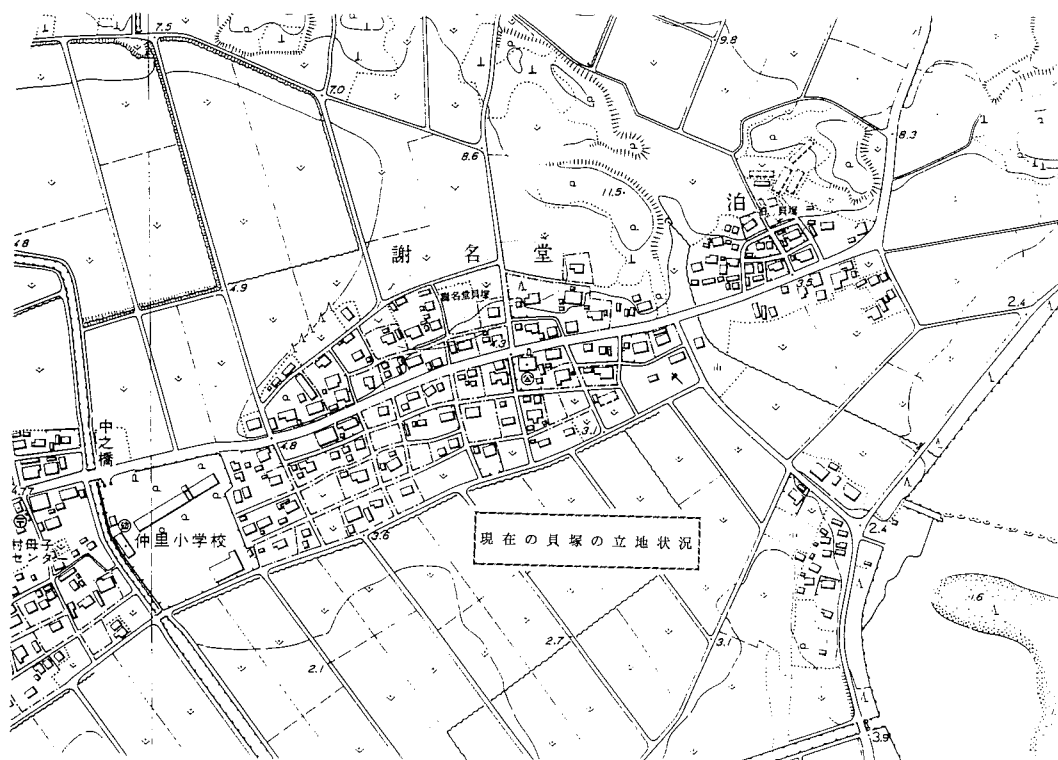


図5